

3 消防隊の活動状況

漏油を確認したことから消火体制を整えた後、3連はしごを設定し救急隊による傷病者接触の支援にあたった。その後、燃料タンクに穴が開いていたことから、油粘土を使用して漏油処理を実施、まもなく留萌消防隊・救助隊が現場に到着したため、救助隊の活動支援にあたった。

写真4 / 漏油部分 写真5 / 燃料タンク
写真6 / 油粘土による処理完了後



写真9 乗車席のスペース。救出後写真



写真7 救急隊による傷病者への接触

4 救急隊の活動状況

通報内容から高エネルギー事故並びに救出に時間を要することを考慮し、出場途上にドクターヘリの出動を要請した。消防隊による3連はしごの設定完了後、車体に近づき車内を確認したところ(写真7～10)、傷病者は60歳代の男性1名、意識レベルII-10、呼吸は浅く速い、脈拍毎分72回、SPO2 92%、両下腿部が運転席側ハンドル付近に挟まれているため手での救出は不能であった。重傷傷病者と判断し処置にあたり、救助隊による救出活動中は継続的に気道の管理に努めた。

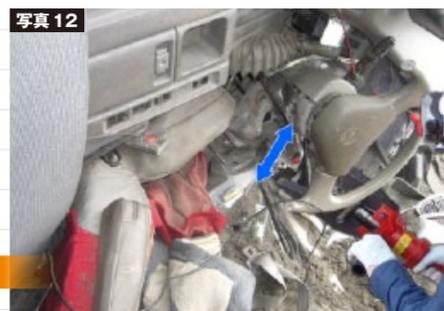


写真12 始めに砂浜とハンドルステアリング部分の間にスプレッダーを挿入し拡張(合成写真)



写真13 次に拡張したスペースをポートパワーにて確保(合成写真)



写真14 さらにスプレッダーの位置を変えて挿入し拡張(合成写真)

6 車外救出後の活動状況

傷病者の車外救出完了後、救急隊にてネックカラーの装着、バックボードへの全身固定を実施後、バスケットストレッチャーへ収容、地上救出方法として選定したスロープ救出の設定は救助隊並びに消防隊にて完了していたことから、直ちに地上へ引き揚げ(写真15)救急車に収容した。



写真15 小平消防署での再現状況

5 救助隊の活動状況

傷病者の車外救出にはスプレッダーおよびポートパワーを用い(写真11)、両下腿部の挟まれ部分を開放するとともに、ハンドルが傷病者への食い込みがないことを確認後、ハンドルをカッターにて切断。これにより傷病者の救出スペースを確保し(写真12～14)バックボードを活用して車外へ救出した。



写真11 使用資機材:
上段左(ポートパワー)、
下段中(カッター)、
下段右(スプレッダー)

7 救急車内及び搬送状況

救急車内での詳細観察では意識レベルがIII-100に低下、呼吸-30回/分、脈拍-80回、SPO2-99%、両下腿部に打撲痕を確認した。傷病者は救急車にて留萌市立病院へ収容したが、そのままドクターヘリにて3次医療機関である旭川赤十字病院に転院搬送された。

当消防組合では決して多くない職員数の中で災害対応にあたるため、組合内での連携は必要不可欠となっている。このような中、本事業は決して特異的なものではなく、今後も同様の現場対応が求められることから、共通の目的である「人命救助」を果たすため、それぞれの分野にこだわることなく技術・知識の向上に努めて参りたい。

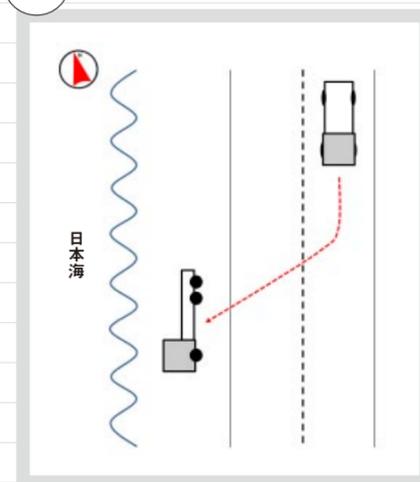
執筆者紹介
留萌消防組合小平消防署
消防課警防係長
伊藤直人
年齢: 34歳
消防士拝命: 平成14年4月1日
趣味: フットサル



実録! 救助事例

新連載
スタート!

図1 「車が海岸に落ちている」



留萌消防組合は、北海道のほぼ北西に位置する留萌市と小平町の1市1町(人口約3万77000人、面積924.73平方キロメートル)により、昭和49年に設立し1本部・2署・1支署、職員63名、消防団209名で構成されている。今後6回にわたり、同消防組合が経験したさまざまな救助事例を紹介していく。救助活動に携わる皆さんの参考になれば幸いた。

第①回 大型トレーラー車両の転落事故

1 通報・事故概要

平成25年6月某日午前、国道232号線上を走行中の一般運転手より携帯電話にて「車が海岸に落ちており(図1)、車内に人が閉じ込められている」との通報を受け、留萌消防署から指揮隊・救助隊、小平消防署から救急隊・消防隊(図2)、旭川市赤十字病院から北海道道北ドクターヘリが出動した。

図2 病院・消防署から事故現場までの距離



写真2



写真3

写真2 / ガードロープの状況
写真3 / 崖壁(高さ約3m)の状況



写真1 横転している事故車両の状況

2 現場到着時の状況

「車が海岸に落ちている」との通報であり、車種等の詳細は不明のまま現場に到着したところ、事故車両は大型トレーラー車両(総重量26260kg、長さ1600cm)であり、海岸のガードロープを突き破り約3m下の砂浜に横転、また、当該車両燃料タンクからの漏油を確認した。